【65】

氏　名（本　籍）	玉瀬耕治（たませこうじ）（大阪府）
学位の種類	教育学博士
学位記番号	博乙第88号
学位授与年月日	昭和57年3月25日
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当
審査研究科	心理学研究科
学位論文題目	行動変容における言語的強化の効果に関する研究

主　査	筑波大学教授	教育学博士	福沢周亮
副　査	筑波大学教授	教育学博士	高野清純
副　査	筑波大学教授	医学博士	内山喜久雄
副　査	筑波大学教授		高森邦明
副　査	筑波大学助教授	教育学博士	小林重雄

論文の要旨

本論文は，行動変容における言語的強化の効果について，総合的な解明を目指したもので，5章から構成されている。

主題の設定に当っては，強化の問題についての従来の，代表的な理論家であるThorndike, E.L., Skinner, B.F., Bandura, A.のそれぞれから，問題が取り出された。すなわち，Thorndikeから強化の組合せの問題が，Skinnerから強化スケジュール（強化率）の問題が取り出され，さらに，これらがBanduraの社会的学習における直接強化，代理強化，二重強化に関連づけられた。

〔研究の目的〕

直接強化，代理強化，二重強化の3種の強化事態での，言語的強化の効果を組織的に検討することを目的とし，この目的の達成のために，13の実験による基礎的研究と応用的研究が行われた。

〔方法と結果〕

強化の組合せの効果　　強化の組合せとは，規準反応（正反応）には正の強化を与え，それ以外の反応には負の強化を与える場合（RW），規準反応には正の強化を与え，それ以外の反応には強化を与えない場合（RN），規準反応には強化を与えず，規準反応以外の反応には負の強化を与える場合（NW）の3つの場合をいうのであるが，このような強化の与え方の違いが，規準反応の習得にどのような差異をもたらすかが調べられた。課題には4つの選択をもつTaffel型言語条件づけ課題

が用いられた。

実験1では児童を，実験2では大学生を対象として，直接強化事態における強化の組合せの効果が比較された結果，直接強化事態における従来の一般的傾向（RW≒NW＞RN）が確認された。

実験3では児童を，実験4では大学生を対象として，代理強化事態における強化の組合せの効果が比較された。その結果，代理強化事態においても強化の組合せの効果が認められたが，NW群の成績が，児童ではRN群に近く，大学生ではRW群に近いことが認められた。

実験5では大学生を対象として，二重強化事態における強化の組合せの効果が比較された。その結果，実験2および実験4と同様の傾向が認められた。

以上の5つの実験から，言語条件づけ課題における強化の組合せの効果に関して，次の結論が得られた。

(1)児童でも大学生でも，また，直接強化でも代理強化でも，一貫してRW群の成績がもっともよい。(2)NW群については，代理強化で児童を対象とした場合以外は，RW群とほぼ同じ成績である。(3)RN群は，3群のうちでもっとも成績が悪い。(4)RW群については，直接強化事態または代理強化事態におけるよりも，二重強化事態におけるほうが成績がよい。

強化率の効果　　ここでは，連続強化によって一定の水準まで学習させた後の，部分強化の強化率の効果が検討された。強化率は，100％強化，67％強化，33％強化，0％強化の4条件である。また，部分強化後には消去試行が課された。

実験6では児童を，実験7では大学生を対象として，直接強化事態における4つの強化率の効果が比較された。その結果，直接強化事態では，連続強化後の部分強化スケジュールは強化率が高いほど成績を維持するのに有効であること，および消去抵抗は強化率が抵い場合により大であることが明らかにされた。

実験8では児童を，実験9では大学生を対象として，代理強化事態における4つの強化率の効果が比較された。その結果，代理強化事態では，児童の場合は強化率の高いほうが成績を維持するのに効果的であったが，大学生では強化率による差が認められなかった。これは，大学生では，代理強化に依存しない自律的な反応が現れやすいことを示すものとみなされた。

実験10では，大学生を対象として，二重強化事態で4つの強化率の効果が比較された結果，強化率の高いほうに成績の維持が認められた。

以上5つの実験から，言語条件づけ課題における強化率の効果に関して，次の結論が得られた。

(1)　部分強化試行では，強化率が高いほど成績を維持するのに有効である。

(2)　消去試行では，強化率が高いほうが成績が低下しやすい。(3)上記の結果は，直接強化，代理強化，二重強化の各事態において認められるが，代理強化を含む事態では，強化率の効果はあまり一貫していない。

道徳判断課題における強化の組合せ　　以上の基礎的研究の結果，強化率に関するものは一貫性を欠く点が認められたため，以下の応用的研究では強化の組合せの問題のみが取りあげられた。用いられた課題はPiaget型の道徳判断課題である。これは，過失を主題として，動機はよいが物質

的損害が大きい物語と，動機は悪いが物質的損害が小さい物語を対にしている。被験者には，この課題で結果論的判断を示す児童がより多いことが確かめられている小学校1年生があてられた。

実験11の直接強化，実験12の代理強化，実験13の二重強化の各事態において，強化の組合せの効果が比較された結果，道徳判断課題においても，3種の強化事態に一貫して強化の組合せの効果が認められ，RW群とNW群が共にRN群よりも成績のよいことが明らかにされた。

以上をまとめて　　直接強化，代理強化，二重強化という3種の強化事態を通じて，強化の組合せに関するほぼ一貫した結果が得られた。すなわち，RW≒NW＞RNという結果である。また，関連して，被験者に一定の選択的行動をとらせる課題においては，強化が主に方向づけの機能をもつことが考察され，しかも，Rに比べてWのほうが，方向づけの機能が強いことが示唆された。

審　査　の　要　旨

本論文は，行動変容における言語的強化の効果を検討したものであるが，直接強化，代理強化，二重強化の3種の強化事態を組織的に総合的に取りあげ，とくに組合せの効果について一貫した結果を得たことは高く評価できる。また，基礎的研究と応用的研究とに共通する問題を取りあげて，教育の実際との接点を求めた点も，本論文が教育心理学の研究に属するものであるだけに評価できる点である。

ただ，一方では，企図されたほどにはBanduraの枠組との関係が必ずしも明らかではないという点，認知的要因をもう少し考慮すべきだという点，確率学習の検討も合わせて行うべきだという点など，問題とすべき点も認められる。

しかし，被験者や実験形態を厳密に統制したうえで，上記の結果を得たことは，この領域に新しい知見を加えたといえるのであって，大きな意義が認められよう。

よって，著者は教育学博士の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。